

「エキュメニカルな交わりの中で」

渉外委員長 富永憲司（柏木教会牧師）

「渉外委員会便り」の原稿締め切りを目前にして、ロシアによるウクライナ侵攻という大きなニュースが飛び込んできました。「人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果」（憲法 97 条）を覆すかのような、理不尽で、大義のない、まるでかつての帝国主義的な侵略戦争が、現代においてなぜ起こるのか、改めて両国の歴史的、文化的、民族的関連や、ヨーロッパの地政学的な問題などを紐解いています。しかも、連日、テレビやインターネットで流されている情報にとっぷり浸っている状態で、みなさまもそうでしょうが、わたくしも連日眠られぬ日々が続く、頭がくらくらするような状態です。

ところで、今後の世界と教会に多大な影響を与えること必至のこの事態を受けて、日本キリスト教会が属している「世界改革教会共同体（WCRC）」は、いち早く加盟各教会・諸団体に「祈祷と行動」を呼びかけました。

そこで、当委員会はすぐにこの呼びかけ文書を翻訳し、各教会、伝道所にお送りすることにいたしました。また、このような事態に際しては、エキュメニカルな交わりの中で覚えあうことが大事との思いから、キリスト教系の新聞社などに載せていただくようお願いいたしました。

さらには、この呼びかけに呼応するように、大会議長有賀文彦先生が日本キリスト教会を代表してこの侵略戦争に反対、抗議する「声明」を出されました。こちらの文章に関しても、日本キリスト教会と公的にお交わりのある教会、諸団体や、日本キリスト教協議会（NCC）、キリスト教系の新聞社、そしてロシアとウクライナ両大使館などに送付するお手伝いをいたしました。

この侵略戦争に関しては、「世界改革教会共同体（WCRC）」も続けて、また日本の諸教会はこれから、この事態に対しての諸文書、声明を出す予定とお聞きしています。必要に応じて、みなさまにお知らせできたらと思っています。

今回の「便り」は、昨大会議長になられた有賀文彦先生の挨拶文、台湾エキュメニカル・フォーラムの報告、そして日本キリスト教会において宣教活動が続けておられる以下の諸宣教師の方々、九州中会宣教師として活水女子大学教授として働いておられる崔 炳一（チェ・ビョンイル）先生、折尾伝道所応援宣教師の李 聖勲（イ・ソンフン）先生、そして平和宣教師として来日し、現在は「東アジア平和センター・福岡」の主事、また本年 4 月から西南学院大学神学部教授となられる黄 南徳（ホアン・ナムドク）先生、下関教会宣教師の李 炳斗（イ・ビョンドウ）先生、それに韓国出身で日本キリスト教会に入会なさった志免教会牧師の金 東佑（キム・ドンウ）先生に、出身教会（教団）を中心に文章を書いていただきます。

これらの記事によって、日本キリスト教会は決して孤立しているのではなく、世界の諸教会と手を携えたエキュメニカルな交わりの中で、日本における伝道奉仕の働きをしていることを、改めて覚えさせられることでしょう。

「公同の教会」に属する一肢として

大会議長 有賀 文彦（大垣教会牧師）

日本キリスト教会は危機の時を迎えていると言われてきました。もちろん、それは不安や恐れを起こさせるための議論ではなく、むしろ日本キリスト教会が教会としての本質に立ち帰り、新しい命と使命に生きるように神から問われ招かれている時と受け止めるべきものです。そして、このたび大会議長に選ばれ渉外委員会の一員ともされた今、このことは渉外関係の事柄でも大切な課題であると思わされています。

わたしたちの教会は、早い時期から内外の諸教会との交わりを大切にしてきました。特に宣教協約を結んだ教会とは、大会・中会・各個教会での交流が行われ、わたし自身も自分の属する近畿中会や中部地区をはじめ有益な交わりの機会を与えられてきました。しかし、「公同の教会」に属する教会の本質に照らして考えるならば、さらに変えられ開かれるべき余地が課題としてまだ多くあるのも確かです。わたし自身、単に「ご近所付き合いも大事にしましょう」といった姿勢とか、教会の教勢拡大や存続ばかりを目的とする中でしかこれらの交わりを考えてこなかったのではないかと反省させられます。そうではなく、それは「日本キリスト教会はこの世界の中で、東アジア、そして日本において何のために建てられているのか」という教会の根本から考え、実践していく必要があることです。

大会会議においても、例えばアメリカの二つの教会との宣教協約のことや日本キリスト教協議会(NCC)加盟に関することなどが、渉外委員会から課題として提起されています。どちらも、これまで多くの方が継続してかわり仕えてきた事柄であり、これからのわたしたちのあり方に深くかわることです。しかし、そうしたことを「一部の人」「一部の委員会」の働きとしてのみ考えるならば、日本キリスト教会全体の「危機」に向き合い、乗り越えていく力が失われることになるでしょう。

わたし自身、新たに学び考えていく必要を覚えています。日本キリスト教会全体においても、これらの課題をまさに教会の存在にかかわることとして覚えたいと思います。

大韓イエス教長老会(統合)

九州中会宣教教師 崔 炳一(チェ・ビョンイル)



大韓イエス教長老会(統合: Presbyterian Church of Korea, PCK)は、韓国プロテスタント教会で最も歴史が長く、長老教会の代表的な教会です。その始まりは 1885 年アメリカ北長老教会から派遣されたアンダーウッド(Horace Grant Underwood, 1859-1916、韓国名は元杜尤(ウォン・ドウウ))にさかのぼります。その後、アメリカ南長老教会、カナダ長老教会、オーストラリア長老教会からの宣教教師らが加わるのです。1907 年に韓国人牧師 7 名が按手を受けると宣教教師と韓国人牧師によってできた最初の老会(中会)である「独老会」(ドンノフェ)が設立され、1912 年に初の総会を開催します(牧師 96 名[外国人宣教教師 44 名、韓国人牧師 52 名]、長老 125 名)。

2020 年の統計によると、全国に 69 の老会が組織されており、教会は 9,341、牧師は 21,050 名、信徒は 2,392,919 名です。代表的な教会として、セムナン教会(アンダーウッドが設立、ソウル市所在)、永楽教会(朝鮮戦争後、北からの避難民を中心として設立した教会、ソウル市所在)、朱安長老教会(信徒の伝道によって成長した教会、インチョン市所在)などがあります。

統合の傘下には、韓国最大の神学校である長老会神学大学(ソウル所在)の他、全国に 7 つの神学校があり、博士課程まで設置されています。また、13 校以上の総合大学に宗教主任を派遣しています。神学的傾向は包容的で、ウェストミンスター信仰告白を信仰の基準としつつ、「私たちの信仰」という独自の信仰告白をも採択しています。WCC と WCRC に加入し、カトリック教会と北朝鮮の朝鮮キリスト教連盟とも神学的対話を続けています。日本キリスト教会の他、在日大韓基督教会と日本基督教団と宣教協約を締結しています。現在、九州中会には 3 名の牧師が活動しています。



折尾伝道所応援宣教師 李 聖勲(イ・ソンフン)

私が属している教団は、大韓イエス教長老会(統合)です。かつて1884年、当時朝鮮に宣教師により福音が伝えられ、更に1907年には大きなリバイバルが平壤で起こりました。それ以降韓国のキリスト教は成長し続け、国と国民と生死苦楽を共にする宗教として位置付けられ、韓国の将来はキリスト教次第だとも言われました。けれども、韓国の教会は、様々な歴史的な辛酸をなめる中で、浮き沈みも経験しました。そうした中で統合教団は、兄弟関係のような大韓イエス教長老会(合同)と共に、韓国のキリスト教をリードする主導的な役割を果たしております。

現在、統合教団には9,000か所余りの教会があり、信徒数は240万人位です。日本キリスト教会九州中会には、崔 炳一先生と黄 南徳先生と私が統合教団から派遣され、恵みのうちに仕えております。日本にきつと大きなリバイバルが起こることを待ちわびております。



東アジア平和センター・福岡 センター長 黄 南徳(ホアン・ナムドク)

私は2019年に大韓イエス教長老会(統合・PCK)から日本キリスト教会にエキュメニカル宣教協力者として派遣され来日しました。現在九州中会に所属し、東アジア平和センター・福岡のセンター長として平和運動をしています。大韓イエス教長老会(統合)は、日本キリスト教会が第61回大会で公式に宣教協約を結んだ教団です。2020年(106回)の統計によると、69の老会(中会)と9,341の教会があり、全体の教徒数は2,392,919人となっています。総会で派遣された世界宣教師は、2022年1月27日現在91カ国795家庭、全体で1,508人です。また、本教団は韓国基督教教会協議会(NCKK)の会員教団で、教会の一致と社会を福音化するために働いており、世界教会協議会(WCC)、アジア・キリスト教協議会(CCA)、世界改革教会共同体(WCRC)、世界宣教協議会(CWM)などの国際機構の会員として世界エキュメニカル運動に参加しています。その他にも、世界各国の教団と地域教会とのエキュメニカル協力を通じて福音の証言と社会ボランティア活動を共に行っています。大韓イエス教長老会(統合)と日本キリスト教会は、宣教協力の精神に基づき、今後、より活発な人的交流を通じて平和の新しい時代を切り開かなければなりません。

大韓イエス教長老会(合同)



下関教会宣教師 李 炳斗(イ・ビョンドウ)

大韓イエス教長老会(合同：The General Assembly of Presbyterian Church in Korea)は、1912年に設立された大韓イエス教長老会の分派の一つで、1959年に分離された教団です。ウェストミンスター信仰告白と大・小教理問答を標準文書として持っており、長老教憲法の政治原理を持ち、改革主義神学路線に立っています。教勢は、現在163の中会、11,656教会からなり、牧師25,477人、講道師700人、伝道師11,858人が所属し、教団から派遣された宣教師は2,562人です。信徒は2,556,182人です。総会直営の神学校は総会神学院で、その他総会の承認する神学校として11校が全国にあります。

私の出身教会である水宮路教会は、釜山の海雲台に位置し、1975年6月に鄭弼禱(ジョン・ピルド)牧師によって開拓されました。翌1976年4月、水宮ロータリーに教会を竣工し、二度礼拝堂が建てられ、2001年に現在の海雲台に移転しました。水宮路教会は「み言葉中心の教会/恵中心の教会/宣教中心の教会」をスローガンとし、世界宣教に重点を置いて活動しています。開拓初期の教会名は「宣教教会」で、500名の宣教師を派遣することを目標としていましたが、現在1,000名以上の宣教師を派遣し、将来は5,000名の宣教師を全世界に派遣することを目標としています。登録信徒は35,000人を超え、牧師79人、講道師4人、伝道師40人、神学生5人が奉仕しています。

大韓イエス教長老会高神(コシン)派



志免教会牧師 金 東佑(キム・ドンウ)

私は大韓イエス教長老会高神(コシン)派の三一(サムイル)教会出身です。教会名は三位一体に由来したと言われます。高神派は日本帝国による神社参拝強要に反対運動を起こし投獄された、いわゆる出獄聖徒らが独立後に中心となった教派で、朝鮮のほぼすべての教会が神社参拝に屈した時、最後まで命をかけて信仰を守ったという誇り高い教派です。三一教会はそういった高神派の最初の教会です。というわけで、三一教会と高神派を、あの有名な朱基徹(チュキチョル)牧師の精神的な後裔と言う学者たちもいます。高神派は改革派長老教会を標榜し、日本では日本キリス

ト改革派教会、日本同盟基督教団と関係を結んでいます。時代の移り変わりによる変化はありますが、日本キリスト教会と礼典的に非常に似ている教会だと思います。神学的には高神派の方が一層保守的だと思います。残念ながら現在高神派は日本キリスト教会との協力関係は結んでいませんが、同じ改革神学の流れにある長老派教会として同質感を持っていると思います。いつか同じ主の教会としてお交わりできれば幸いです。

地政学的な緊張のなかで祈る、教派を超えた交わりと連帯

渉外委員 大石周平(府中中河原教会牧師)

今やふたたび欧米中露の地政学的緊張が高まり、2月24日のロシアによるウクライナ侵攻の結果、欧州諸国をはじめとする世界の人々が核の脅威さえ覚えるような、新たな歴史的局面を迎えている。3月2日灰の水曜日午後5時(日本時間3日午前1時)、WCRCはルーテル世界連盟や欧州教会議会等とともに「ウクライナのために祈る礼拝」を主催した。そこでは、シェルターや亡命地に住民が避難する渦中のキエフやルガンスクなど、ウクライナ中東部から、正教会・メノナイト・ルーテルの諸教会による現地レポートがなされた。また、国境を越える人々の水・食料・衣服の支援および難民受け入れに奔走する西部カルパティアの改革派教会や、ポーランドの諸教会・神学校の声が届けられた。命を助けるために教派や国籍の壁を乗り越え、差別や偏見を拒否して愛に生きようとの切実な呼び声が響く。韓国の代表が礼拝の中で、自分たちもかつて同じ苦しみを味わったので沈黙できないと言われたことが、私の胸には痛く刻まれた。歴史を振り返り、現れた差異や罪の現実から目を逸らさずに共に祈ることは、それ自体が和解の出来事であり、当たり前ではない。私たちの罪と脆さが剥き出しになるとき、悔い改めることなしに祈りに連なることはできず、赦し合うことなしにアーメンと叫ぶことはできない。礼拝では、平和を求めるウクライナとロシアの人々のための執りなしがなされると共に、ミャンマー・シリア・エチオピア北部ティグレ地域・イエメン・アルメニア・南スーダンのための祈りもなされた。それぞれの痛みは異なるとしても、世界各地で同じ主に立ち帰り、十字架を仰ぐ姉妹・兄弟がいることを確かめることに、深い感謝と喜びがあった。

さて、東アジアの文脈では、「国家安全法」(2020年6月)から1年半をへて「民主と自由が消滅しつつある」(キリスト新聞、2022年2月21日記事より)香港を覚えて祈ることもなされてきた。ウクライナ情勢がニュース一面を占める以前、世界が目を向けていたのは、米中の地政学上の谷間というべき東アジアであり、太平洋の島々だった。香港の亡命者を受け入れた台湾からは、次は自分たちがという不安の声も聞こえた。台湾基督長老教会が母体となり、WCRC等と協力して行われてきた台湾エキュメニカル・フォーラムが、2021年12月7・8日に初めてオンラインで開かれた。主題は、「新冷戦」ともいうべき緊張関係のただ中で、教会がどう祈り連帯するか。台湾・香港・シンガポール・フィリピン・日本からスピーカーが立てられ、それぞれの視座から平和ネットワーク構築の必要性が訴えられた。沖縄の基地問題に言及しながら「人権侵害は各所で起こる世界の問題だ」と言われたマニラの司教の言葉が心に残る。問題は、米国か中国かのあれかこれかではない。「かつてエジプトとシリアが争ったとき、どちらに付くかではなく、どの小さな島々と連帯するかを預言者は問うた」という発言に、ある旧約学者が同意した。「信仰に基づいて弱さに連帯すべきということですね」。地政学的緊張の狭間にあって、私たちも、不安に委ねず主に信頼し、小さくされた人々にひたすら愛をもって寄り添う教会でありたい。遠くであれ近くであれ「疫病・剣・飢饉」の渦中にある人々と、隔ての中垣を撃ち壊す和解のネットワークに連なって祈り続けたい。